

本資料及び資料に含まれる第三者著作物を再使用する場合、  
利用者は、それぞれの著作権者より使用許諾を得なくてはなりません。

思索と言語

## 言葉を科学する：人間の再発見

奥 聡

### Day 15: 「言葉の使用」の再発見・全体のまとめ「人間の再発見」

1. ことばを使う能力
2. 総まとめ
3. この授業のねらい
4. 最後に：言語科学の「実用性」
5. 授業評価

### Pre-class Work 15

(B)

(C) 次のうち先週の授業で、論じたことに当てはまらないものを2つ

1. ことばを(対人間で)使う能力：語用論の研究
  - (1) 実際の言語使用
    - a. 「もしもし、A さんいますか？」  
(実際に言いたいこと：A さんに代わってください)
    - b. 「この部屋、寒いね」「この部屋、寒くない？」  
(実際に言いたいこと：ストーブつけてください)
  - 文法的な文を生成する能力
  - 特定の場面で、どのような文（表現）を実際に利用するのか？
- (2)
  - a. 文字通りの意味
  - b. 話者の意図する意味
- (3) (2a)と(2b)の関係が、完全にランダムであれば、コミュニケーションが成立しない確率が大きくなる
- (4) 多くの場合、話者の意図が伝わる。なぜ？
- (5) (2a)と(2b)をつなぐ、言語使用のルールがあるはず  
=> 意味論・語用論

(6) **Class work 15-1 : 「回りくどい言い方ですか」**

部屋の中が寒くなってきた。

暖房のスイッチのそばにいる人に向かって、別の人がいました。

「この部屋の中少し寒いね」

(発話者の意図は：暖房のスイッチをいれて！)

暖房のスイッチを入れて欲しい時に、直接的な表現で言わずに、遠まわしな言い方で依頼をしている

- a. このような言い方をする利点は何だと思うか？
- b. このような言い方をする場合の欠点は何かあるだろうか？

(7) ポライトネス(politeness)という考え方

対人関係を円滑にするための社会言語学的行動

Brown, P., and S. C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage* (Cambridge University Press)

(8) 2つの問題

- a. なぜ、遠まわしな言い方で通じるのか
- b. なぜ、遠まわしな言い方をするのか

(9) Cooperative Principle (Grice 1975, Logic and Conversation)

会話の目的に合うように適切に発話を行いなさい

(10) 「この部屋少し寒いね」

これを聞いた人はどう思うか：

- a. 発話者は部屋の状態（に対する自分の感想）を述べている
- b. この発話の目的は何だろうか
- c. 発話者は寒いことを嫌がっているのかもしれない
- d. 発話者は暖かくなればよいと思っているのかもしれない
- e. 自分（聞き手）は暖房スイッチのそばにいる
- f. 自分に向かって話しかけている
- g. 暖房を入れて欲しいという依頼かもしれない  
=> 「暖房を入れましょうか？」

(11) 発話者は(9)に従い、その場に最もふさわしい発話の意図が通じるであろうと期待して発話する

(12) 聞き手は(9)に従い、その発話にはその場に最もふさわしい発話意図があるだろうと推測する

(13) 意図がうまく通じる（ことが多い）

- (14) では、なぜわざわざ回りくどい・遠まわしな言い方をするのか?
- (15) ポライトネス理論の説明
- a. 人はだれでも自分の自由を制限されたり、行動を邪魔されたりしたくないという欲求をもっている (=「否定的顔 **negative face**」)
  - b. 人はだれでも自分の行動や意見がよいものであると認められたいという欲求を持っている (「肯定的顔 **positive face**」)
- (16) 「直接的な依頼」は、相手の行動への介入
- a. 依頼をされた人の「**negative face**」を脅かす発話行為
  - b. 依頼する人も自分の「**positive face**」を損なう発話行為
  - c. 遠まわしな表現で依頼であることを推測してもらうことで、依頼された人の **negative face** も、依頼した人の **positive face** も余りそこなわれないようにしようとしている
- (17) A: 授業終わったら、一緒にお好み焼き食べに行かない?  
B: レポートたまっているんだよね
- (18) Bは誘いを断っている
- (19) Bの返事を聞いて、Aが行う推論の一例
- a. 行くか行かないか尋ねているのに、それには答えずに、別のことを言い出した
  - b. レポートがたまっているということと、私が食事に誘ったこととの間に何か合理的な関連があすはずだ ((9)の原則による推論)
  - c. レポートがたまっていれば、それをできるだけ早く片付けてしまわなければならない。余分な時間はない
  - d. お好み焼きを友達と食べに行けば、それだけその時間は宿題に回せなくなる
  - e. だから、きっと私の誘いを断っているのだ
- (20) なぜ、(直接的な言い方で断らずに) 遠まわしな言い方をするのか?
- (21) a. Aはそれが良いことであると思ってBを誘っている
- b. 直接的に断れば、Aの「**positive face**」をつぶしてしまうことになる
- c. 遠まわしな言い方で、断っていることをAに推測させることによって、Aの **positive face** をできるだけつぶさないようにしていますよ、というサインを送りながら、意図を伝えようとしている
- (22) 人間の実際の言語活動は、文字通りの意味での解釈を超えたものがたくさん
- (23) ほとんど慣習化しているものもある (自分は回りくどい言い方は嫌いという人も)  
「もしもし、Xさんいますか?」
- (24) このような文字通りの意味と話者の意図する意味とのズレも含め、実際の言語運用を社会的な側面も含めて研究する：語用論 **pragmatics**
- (25) これも直接的に教わらなくても自然に身につく

## 2. 総まとめ：この授業で扱ったトピック

- (26) 「単語」の再発見
- (27) 「言語音」の再発見
- (28) 「文を組み立てる仕組み」の再発見
- (29) 「意味」の再発見
- (30) 「言語獲得」の再発見
- (31) 「ことばの使用」の再発見
  
- (32) それぞれ、ほんの一部です
- (33) とても重要な区別：E言語とI言語
  - a. E言語：表に出てくる（見たり聞いたりできる）言語現象
  - b. I言語：各自の頭の中のことばを操る仕組み

\*ガリレオ・スタイル（自然科学の方法論）

- (34) 「E言語」ではなく「I言語」が言語の実体  
=> 近代科学の考え方：  
空気抵抗も摩擦も取り除いた理想化されたものが物理現象の実体
- (35) 中谷宇吉郎：雪の結晶の研究
  - a. 実際に目に見える雪の結晶は「実体（I言語）」ではなく、ノイズの多い物理現象（E言語）
  - b. 雪の結晶を作るその背後にあるメカニズム（I言語）が実体

## 3. この授業のねらい

- (36) 科学的言語研究の方法（考え方）とその成果を（一部）紹介
- (37) 言語とは何かを考える（生物学的視点から）
- (38) 科学とは何かを考える（身近な題材「言語」を利用して）
- (39) 「あたりまえ」を不思議に思う持つ心  
「常識を疑え」「広い視野をもて」（=<口で言うほどやさしくありません）
- (40) 自分のこれまでの信念に反することにであったとき
  - a. よく考えずに反発する
  - b. よく考えずに（権威的意見を）鵜呑みにする
  - c. 新しいものへの健全な好奇心と、適度の懐疑心のバランス
- (41) 自分が思っていたこととは別の視点・考え方がえられれば、この授業は成功です（知識を増やすことが目的ではない）

#### 4. 最後に：言語科学の「実用性」

- (42) 科学は人を思いこみ（偏見）から自由にしてくれる  
方言への思い込み、障害者への思い込み、子どもの言語能力への思い込み、etc.
- (43) 人間が好きになる、自分が好きになる

===以下は、Day 13 (Jan/16)に配布したものと同じです===

### Term Paper

<https://webtube.c11.hokudai.ac.jp/>

「言葉を科学する」のクラスに入り、「14-Term Paper (言葉科学)」

WebTube に添付文書として提出。2月3日(月)23:00 締切

#### [A]

(A-1) 添付の「言語獲得理論の動き」から[2 言語の「生得性」をめぐる論争] (pp.16-26) と[3 子どもへの言語入力の見直し](pp.27-32)を読んで、その内容を分かりやすくまとめなさい。(この部分には自分の意見や感想を書かないこと) [ポイント：内容が正確に理解されていること、指定された分量で適切にまとめられていること、読み手に分かりやすく自分の言葉で書かれていること]

(A-1)を A4 で 1 ページにまとめる[与えられたページを有効に使う。ページを越さない]

(A-2) 上記に関して、自分の意見・コメントを書きなさい。授業や宿題で学んだこととうまく関連付けて論じるとよい。参考にした資料があれば、その出典を必ず明記すること。

(例：授業のハンドアウト Day 4 の(6)、ちょっと feed back の Day 7 の p.2、宿題用の文献\*\*\*の p.\*\*など。また授業・宿題で扱った資料以外を参考にした場合は、その出典も明記すること)。つまり、(A-1)を読んで、純粋に自分の意見・自分が考えたことと、他の資料で述べられていたことを明確に区別して書くこと。

(A-2)を A4 で 1 ページにまとめる[与えられたページを有効に使う。ページを越さない]

(A-1) と (A-2) を合わせて、1つのファイルにする。

Word でファイルを作成 (Word が使えない場合は PDF で) し、それを WebTube に添付して提出。(添付は一度しかできないので操作は慎重に)。文書内の最初の行に、学生番号と名前を必ず入れる。

[B] (B-1) 添付の「現代言語学の学際性」から[3 生成文法の誕生と進展] (pp.224-231) と[4 現代言語学の課題](pp.232-237)、及び[5 おわりに] (pp.238-239) を読んで、その内容を分かりやすくまとめなさい。(この部分には自分の意見や感想を書かないこと) [ポイント：内容が正確に理解されていること、指定された分量で適切にまとめられているこ

と、読み手に分かりやすく自分の言葉で書かれていること]

(B-1)を A4 で 1 ページにまとめる[与えられたページを有効に使う。ページを越さない]

(B-2) 上記に関して、自分の意見・コメントを書きなさい。授業や宿題で学んだこととうまく関連付けて論じるとよい。参考にした資料があれば、その出典を必ず明記すること。

(例：授業のハンドアウト Day 4 の(6)、ちょっと feed back の Day 7 の p.2、宿題用の文献\*\*\*の p.\*\*など。また授業・宿題で扱った資料以外を参考にした場合は、その出典も明記すること)。つまり、(B-1)を読んで、純粹に自分の意見・自分が考えたことと、他の資料で述べられていたことを明確に区別して書くこと。

(B-2)を A4 で 1 ページにまとめる[与えられたページを有効に使う。ページを越さない]

(B-1) と (B-2) を合わせて、1つのファイルにする。

Word でファイルを作成 (Word が使えない場合は PDF で) し、それを WebTube に添付して提出。(添付は一度しかできないので操作は慎重に)。文書内の最初の行に、学生番号と名前を必ず入れる。

[C](オプション) (成績には関係しません: 感想を自由に書く) 添付文書: 寺田寅彦「科学者とあたま」

## Grading System (Day 4 に発表したものを再掲します)

(A) 期末レポート: 20% (詳細は追って指示します)

(B) Homework/Class Work: 80%

Homework: reading assignment が中心 (40% ~ 50%)

(必要な reading 資料の配布と宿題は WebTube で行います)

Pre-class Work/In-class Work (30% ~ 40%)

授業にただ出てくるだけでなく、授業理解や授業中・授業外の課題に熱心に取り組んだ人、各回の授業でのポイントをよく理解できている人を高く評価するようにしてあります (HW のほかに、Pre-class Work や In-Class Work/Post-Class Work への取り組みが重要)。

期末レポートだけで成績が決まるということ (それだけで「不可」になる、あるいは期末レポートで一発逆転) はありません。(単純な「出席点」はありませんが、遅刻や欠席は Pre-Class Work/Post-Class work の評価に直結します)

成績分布は、比較的大人数クラスなので、正規分布を基本とし以下を目安とします (微修正あり) 秀: 10%程度、優: 30%程度、良: 45%程度、可: 15%程度

(取り組みが一定以上不十分であれば「不可」もあります)